

北尾春圃 医案①

一人。年四十。大頭痛を患う。二旬已まず。発熱、眼赤く、頭汗足冷。三人をして頭を抱かしてめて猶（なお）堪え難し。之を脈するに緩。沈診するに全く無し。其の腹按ずることを好み、臍下の動気亦微なり。

予以為（おもえ）らく、難経に曰う、脈を持して之を按じて骨に至り、指を挙げて来たること疾き者は腎の部なりと。今、沈診して骨に至り、指を挙げて全く無き者は命門の真火衰う。急に八味丸料を以て湯と為し、人参を加え、附桂を倍し、之を進むること二貼。頭痛忘るるが如く、二十貼にして安ゆ。